

異世界の海賊船の船倉
に転生した元カウンセ
ラーの Ω が航海長 α に
「お前の番は俺だけだ
」と番の刻印を首筋に
刻まれながら揺れる船
上でカントを犯されて
墮ちる話

船の揺れに合わせて木箱がぎしりと軋むたび、太腿の内側をぬるい液体が伝い落ちた。

「っ……は……っ♡ ふ、う……っ♡♡」

暗い船倉の片隅で膝を抱えるミナトの額に、脂汗が浮いている。抑制剤が切れて五日。ずっと堪えてきた。堪えられると思っていた。けれど今、下腹の奥でとろとろ♡と熱が脈打つのを止められない。

（やだ……また、濡れてる……っ♡♡）

膝の間に手を滑り込ませると、ズボンの布地が指先にじっと張り付いた。カントが、自分の意志とは無関係に蜜を零している。前世では男だった。二十八年間、ずっと男だった。こんな器官は無かった。転生して二年、抑制剤で封じ込めてきたこの身体が——いま牙を剥いている。

「……ん、う……っ♡♡ だめ……こん、な……っ♡」

指先がズボン越しに触れただけで腰がびくりと跳ねた。カウンセラーだった自分が、こんなことで——。震える唇を噛み締めたとき、船倉の扉が軋んで開いた。

逆光の中に、大きな影が立っている。

「——こんなところにいたのか」

低い声。抑揚のない、航海長の声。ガルシア・ヴェイン。左頬の刀傷が闇の中でうっすら光る。百八十九センチの長身

が船倉の天井を圧するように屈み、迷いなくこちらへ歩いてくる。

「っ、来るな……！」

「匂いが甲板まで上がってきてる。このままだと船じゅうに知れるぞ」

声に感情はない。ただ事実を述べている。 α の嗅覚が自分のフェロモンを捉えているのだと悟って、背筋が凍った。

「……航海長室に行くぞ。立てるか」

返事を待たず、ガルシアの大きな手が腕を掴んだ。その掌が——灼けるように、熱い。

「ひ……っ♡♡」

触れられただけで声が出た。自分の口から零れた甘い音に、ミナトは目を見開く。

（触れられただけ……っ♡ 腕を掴まれただけで……こんな……っ♡♡）

航海長室は狭い。海図台と椅子と簡易寝台。潮の匂いが染みついた壁板。扉が閉まった瞬間、ガルシアの α フェロモンが密閉された空間に充満した。重く、焦げるような匂い。

「ん……っ♡♡ やだ……匂い……っ♡」

膝から力が抜けた。壁に背をつけてずるずると座り込むミナトの前で、ガルシアが腕を組んだまま立っている。

「……ヒートだな」

「っ……知ってたの」

「抑制剤の瓶が割れた日から、数えてた」

あの嵐の夜。木箱に挟まれたミナトを引き出したガルシアの足元に、砕けた瓶が転がっていた。Ω用の抑制剤。二年間の嘘が一瞬で崩れた夜。あのときガルシアは「船長には言わない」とだけ告げて背を向けた。それから五日間——黙って、待っていたのだ。

「ひ……っ♡ はう……っ♡♡ だめ……近くに、いないで……っ♡♡」

ガルシアが近い。二メートルも離れていないだけで、全身がαのフェロモンに浸されていく。身体の芯がきゅん♡と疼き、カントから蜜が溢れて太腿を濡らす。ズボンの布地はもう限界まで湿っていた。

「……出て行ってほしいなら、そう言え。ただし扉を開ければ匂いが漏れる。四十人の乗組員に知れるぞ」

「……っ♡」

正しい。航海長として、船の秩序を守るために正しいことを言っている。でも——同じ部屋に閉じ込められて、自分の身体が蜜を垂らしている。その状況が、前世の記憶と重なった。境界線を越えてくる患者の手。『先生がいないと死ぬ』と縋りつく指。

「っ……出て行って……っ♡ お願いだから……っ♡♡」

声が掠れた。カウンセラーの仮面がもう保てない。ガルシアの冷徹な瞳がミナトを射抜いた。

「……わかった。椅子で眠る。寝台を使え。近づかない」

それだけ言って、ガルシアは部屋の反対側に移動した。椅子に深く座り、目を閉じる。腕を組んだその手が——肘掛けを握りしめて、木が軋む音を立てていた。

二日が過ぎた。地獄のような二日間。

ミナトは寝台で身体を丸め、声を殺して耐えた。ガルシアは椅子から動かない。近づきもしない。ただそこにいる。相槌も打たない。慰めの言葉もない。ただ——ミナトが悪夢にうなされて目覚めたとき、黙って水を差し出した。

「……ん……」

冷たい水。火照った喉にその冷たさが沁みて、涙が零れそうになった。

「……前世で」

三日目の夜、ミナトがぼつりと口を開いた。ヒートの波が引いた束の間の風。

「人の心を聞く仕事をしてた。でも自分の心は、誰にも聞いてもらえなかった」

ガルシアは黙っている。

「患者に依存された。境界線を踏み越えられた。『あなたがいないと壊れる』って言われて……俺は、壊れた」

沈黙。嵐の去った海のような風。

「……俺の母はΩだった」

ガルシアが口を開いた。ミナトが顔を上げる。

「親父の番だった。親父は母を独占して、壊した。番ってのはそういうもんだ。片方がもう片方を呑み込む」

「……だから番は作らないと？」

「ああ」

闇の中で、ガルシアの横顔が見えた。刀傷のある頬。無表情の奥に——自分の本能を恐れている男の顔。感情がないのではない。感情を出せばαの獣性が暴走すると恐れている。父と同じになることを。

(……この人は)

(この人は、父親と同じじゃない)

ミナトの胸の奥で、何かが緩んだ。

四日目。ガルシアがミナトの髪を結んだ。暑さ対策だと言って。荒れた大きな指が不器用に髪を束ねる。首筋に指先が触れるたび、ミナトの身体がかすかに震える。ヒートの余波がまだ残っている。

「……ありがとう」

「ああ」

ガルシアが椅子で眠った。ミナトが毛布をかけた。刀傷のある頬に毛布の端が触れ、微かに眉が動く。その寝顔を見ていたら胸がぎゅっと痛んだ。

（……どうして、こんな気持ちになるんだろう）

——その安堵が、五日目の夜に砕け散った。

最初は微熱だった。次に、シーツの感触すら刺激になった。そして——カントが決壊するように蜜を溢れさせた。

「お……っ♡♡ やだ……っ♡ また、来る……っ♡♡」

二日間の風は、嵐の前の静けさに過ぎなかった。反動が来た。抑制剤なしで身体が本来の発情期を起こしている。さっきまでとは桁違いの熱。全身の肌が過敏になり、空気に触れるだけで痺れが走った。

「は……っ♡ ん、う……っ♡♡ あ……っ♡♡♡」

シーツを握りしめたミナトの太腿を、透明な蜜がとめどなく伝う。前世にはなかった器官が、 α を求めて叫んでいる。自分の身体が自分のものでなくなっていく恐怖に、涙が滲んだ。

ガルシアは椅子から立ち上がらなかった——立ち上がらなかったのではない。椅子の肘掛けが、ばきりと音を立てて砕けた。ガルシアの手が、木を握り潰していた。

「……おかしい」

ガルシアの声が掠れている。呼吸が荒い。密閉された航海長室に、ミナトの Ω フェロモンが充満している。だがそれだけではない。

「二年間、何も感じなかった。お前が Ω だと、本能が知らなかった。なのに今——身体が、止まらない……」

ガルシアの瞳が変わった。 α の瞳孔が縦に裂ける。この世界の α 覚醒の徴。

(運命の、番——♡♡)

フェイテッド・メイト。先天的に決まった番。抑制剤がフェロモンを消していたから、二年間ガルシアの α 本能が反応しなかったただけだ。今、その蓋が外れて——二年分の引力が一気に解放された。

「出ていけと言ったのに……っ♡♡」

ミナトの声が震える。四日間で積み上げた安堵が崩れ落ちていく。『この人なら大丈夫』——その判断が、最悪の形で裏切られようとしている。身体を求められる恐怖。前世の患者が境界線を越えてきた記憶と重なる。

ガルシアが立ち上がった。椅子が倒れる。

ミナトが身構えた。だが——

ガルシアは寝台に近づいてきて、しかし触れなかった。ミナトの目の前で、自分の手の甲を噛んだ。がりっ、と歯が肉を抉る音。赤い血が指の間から滴り落ちる。

「……逃げろと言いたい。だが逃げ場がない」

掠れた声に、苦痛が滲む。母を壊した父と同じことをしようとしている自分。その自覚が、この男を引き裂いている。

ミナトの視界が滲んだ。この男が——自分を壊すまいとして、自分を傷つけている。カウンセラーとしてではなく、ただ一人の人間として。それが、見ていられなかった。

「……噛むな、手を」

ミナトがガルシアの血だらけの手を取った。熱い。αの身体が番を求めて沸騰している。ミナト自身もヒートで灼けているのに、ガルシアの手はそれ以上に熱かった。

二人の手が触れ合ったまま、沈黙が降りる。船がゆっくり揺れている。『触れてくれ』とも『触れるな』とも言えない。

「……お前は、父親じゃない」

ミナトが口を開いた。

「お前が怖いのは、独占することじゃないだろ。独占して、壊すことだ。でも——お前はいま、俺を壊さないために自分の手を噛んで血を流してた」

ガルシアの血の滲む手を自分の頬に当てた。荒れた掌の感触。潮と鉄の匂い。

「俺は前世で、必要とされるのが怖かった。必要とされることが支配と同じだった。でも……」

嘘じゃない。怖い。怖いけれど——この男の苦痛のほうが、自分の恐怖より重い。

「お前に必要とされるのは、怖くない」

ガルシアの手がミナトの頬を包んだ。血と潮で荒れた大きな掌が、ミナトの小さな顔を挟み込む。

額に、口づけが落ちた。

「ん……っ♡」

柔らかい。唇が離れ、鼻先が首筋に降りてくる。ミナトの項腺——うなじの腺に、ガルシアの鼻先が触れた。深く、深く、匂いを吸い込む。

「……いい匂いだ」

たった一言。低い声の振動が首筋の皮膚を伝い、カントがきゅん♡♡と締まった。蜜がどろりと零れ、太腿を新たに濡らす。

「ひ……っ♡♡ 嗅がないで……そこ、だめ……っ♡♡」

「嫌か」

「嫌じゃ、ない……から、やだ……っ♡♡♡」

嫌じゃないのが怖い。身体だけじゃない。心が求めている。冷静に分析しようとする自分が——もう、分析できない。

ガルシアの手がミナトの上着の紐を緩めた。粗末な麻の服が肩から滑り落ちる。日に焼けた薄い肩。華奢な鎖骨。その上を荒れた指先がゆっくりと辿った。

「っ……♡ あ……♡♡」

「痛いか」

「ちが、う……っ♡♡」

指が薄い胸に触れた。乳首に指先が当たった瞬間、ミナトの背中が弓なりに反る。

「あっ♡♡ ん、やっ……そこ、触ったこと、ない……っ♡♡」

「……前世では男だったんだろう」

「っ……♡♡」

「この身体の使い方を、知らないのか」

声は責めていなかった。ただ確かめている。海図を読むように、ミナトの身体の反応を一つずつ探っている。

親指が乳首をくりっ♡と擦った。

「ひんっ♡♡ あ……っ♡♡ なに、それ……いま、全身に……っ♡♡♡」

乳首から電流のような刺激が走り、カントまで直通で繋がった。ぬるり♡と新しい蜜が零れる。

「……ここと繋がってるのか」

もう一方の手がミナトのズボンの結び目に掛かった。すると紐がほどかれ、布が剥がされる。カントが——潮風の冷たい空気に晒された。

「やっ♡♡ 見ない、で……っ♡♡」